

ジャガイモと映画 (6)

<ポテトチップス2>

Web ジャガイモ博物館館長 あさ ま かず お
浅間 和夫

25 パパが遺した物語

(原題: Fathers and Daughters)

2015年、アメリカ・イタリア合作映画。
監督: ガブリエレ・ムッチーノ。

1989年、小説家のジェイク (ラッセル・クロウ) は、妻と幼い娘ケイティ (カイリー・ロジャーズ) の3人で幸せに暮らしていたが、ある日事故で妻を亡くし、自分も後遺症に悩むことになる。これを危ぶむ義姉のエリザベスはケイティを養女として預かろうと養育権を取る訴えを起こす。しかし、ジェイクは頑なに拒み、娘のために小説執筆に没頭する。(写真1)

やがて退院したジェイクは、7歳の愛娘ケイティに、「ずっと一緒」だと約束するが、その父も、バスルームで発作を起こして転倒し、頭を打って死んでしまう。

それから20年あまり後、過去のショックから人を上手く愛することができなくなっ

ていたケイティ (アマンダ・セイフライド) だったが、父の遺作を敬愛する作家志望のキャメロンに惹かれる。彼との出会いをきっかけに、自らを傷つけるような不安定な生き方を変えようとする。しかし、寂しさに、行きずりの男に体を任せたりする。キャメロンは激怒し去ってしまう。ケイティは希望を失い塞ぎ込む日々を送るが、最後まで娘の幸せのみを望んだ父の気持ちに伝えるべく、再度、正面からキャメロンと向き合う決意を固めるのだった。

この映画を本誌に取り上げたのは、ジェイクが娘ケイティを「ポテトチップ」と呼んでいるためである。髪色がアクリルアミドを連想する焦げた色ではなく、誰もが好きそうなブロンドで綺麗なため、父親が愛情をたっぷり込めて付けたニックネームである。

なお、彼女の幼少時代を演じたカイリー当人は、撮影時父役のラッセルから「イルカ」、「サル」、「カボチャ」などと呼ばれて可愛がられ、本を読んでもらったりしていたとか。「ジャガイモ」と呼ばれないでよかった話である。何故なら、次のような喩え話では困るから。

ヘミングウェイ著『キリマンジャロの雪』(龍口直太郎訳、角川文庫) に、「そしてゆきずりのキャフェでは、あのアメリカの詩



写真1 ジェイクとポテトチップことケイティ

人が、目の前にコーヒー皿を積み上げて、その芋面に間抜けな表情を浮かべながら一人のルーマニア人とダダイズムの運動のことを話していた。」

また、北杜夫著『童女』では、「少女は村では赤ズキンと呼ばれていた。ジャガイモに似た顔立ちの伝わるこの村では、近来こんな可愛らしい子が生まれたことがない。」…とあるから。

26 ニキータ (Nikita)

1990年、フランス映画。監督:リュック・ベッソン。

深夜のパリの薬局に麻薬中毒らしき若者達が薬欲しさに乱入する。警官隊が到着し、撃ちあいになり、一人生き残った不良少女が警官を射殺してしまう。警察署に連行された少女（アンヌ・パリロー）は、取調室で刑事に名前を聞かれた際に男性名の「ニキータ」と名乗ったため、以後それが彼女の呼び名となる。

ニキータに無期刑が下りる。目が覚めると、広いが殺風景なベッドルームに入れられていた。ボブという政府の秘密警察官を名乗る男が現れ、『君は死んだ、墓地に埋葬済みだ』と告げらる。その後、別の人間



写真2 ニキータのカウチポテト族風食べ方

こと政府に雇われた暗殺者として訓練を受けて生きることになる。パソコン、銃、柔道からカツラの付け方まで習っていく。ニキータは時には反抗しながらも、暗殺者に育てあげられていく。

数年経過し、誕生日が近いころ、落書きの増えてきた部屋でテレビを見ながら、赤い袋からポテトチップを取り出してパリッパリッと食べるシーンが見られた。(写真2)

誕生日の後に、ジョゼフィヌというコードネームと仮の職業を持たされ、街で一人暮らしをすることになる。ニキータは、スーパーで会計の時にレジに立っていた男・マルコと恋仲になるが、それでも暗殺者としての仕事は与えられる。(途中の彼女のパワフルなアクションが素晴らしく、それが好きな人にはたまらないだろう。壁を突き破るベンツは、古い車にベンツのパーツをかぶせたアラン・ドロンのテレビドラマ用に制作されたニセ車であったとか)

ある任務で予定が狂い、その後始末やらひどい顛末に疲れて戻ったニキータに、マルコはニキータの裏の顔を知っていること、それでも愛していることを打ち明ける。裏仕事を止めることを奨められたニキータは一人逃亡し、残ったマルコは後を追ってきた警察官に、ニキータの置き土産のマイクロフィルムを渡し、ニキータの行く末を託す…。

テレビを見てみると、野球、サッカー、芸能ゴシップ、事件など々満杯であり、テレビ大好き、外出嫌いの人びとがいつでも存在できる。彼らは堅い椅子や畳よりもカ

ウチ（寝椅子）が落ち着き、ゴロゴロ、パクパクの言葉が似合うライフ・スタイルである。極楽を追い求めたら、それはなんとわが家でのだらだらにあった、という人もいるだろう。ソファに寝そべって ポリポリとポテトチップスのようなジャンクフードを食べる人びとを『カウチポテト族』と言う。このポテトを遡れば"tuber（塊茎）"であり、さらに"tube（ブラウン管）"となるわけであり、元来テレビを見る人、から生れたものらしい。アイダホ州の名産はアイダホポテト。州の絵はがきの中に、ラフな格好をしたアイダホポテト君がベッドに横たわりながら、テレビをみているものがあつた。

27 カウチポテト・アドベンチャー （原題：STAY TUNED）

1992年、アメリカ映画。監督：ピーター・ハイアムズ。

ネイブル家の二人の子供たち、ダリル（デイヴィッド・トム）とダイアン（ヘザー・マコム）は、カウチポテト族の父とキャリアウーマンの母という夫婦の仲に危機感を覚え、友達の家を外泊して二人きりにしてあげようとする。

しかしダリルとダイアンが帰宅すると、家には人の気配がなく、巨大な新品テレビが置かれ、庭には大きなパラボラ・アンテナが取り付けられていた。ダリルがテレビのリモコンをいじってチューニングすると、奇妙な番組が次々と放映され、驚くことに両親がその番組群に出演させられていた。実は、両親は悪魔のセールスマン・ス

パイクの手によって異次元のテレビの世界に捕らえられていたのだ。

24時間以内に助け出さないと2度と二人は戻れなくなるため、メカに強いダリルは放送介入装置で番組の中に入り、両親を助け出そうと考えた。そのためには隣の家の凶暴な犬のところを通り、電波を取らなければならない。テレビの中の両親はフランス革命時代の貴族になって、ギロチン台にかけられそうになっている。勇気を振り絞って狂犬に立ち向かうダリルだったが、多次元テレビのパラボラ・アンテナが、吸い込む獲物を求めて動き始めていた。ダリルとダイアンはテレビに入り、両親を救おうとするが、スパイクは契約者の父だけを助け、母は取り残された。父は再度テレビに入り、スパイクと格闘、彼を倒し、家族は無事もとに戻ることになる。

カウチ族から離れるが、映画館で鑑賞中の飲食にいろいろあり、小生は入る前にコーンスープを飲み、中でガムなどしている。ポテチやせんべいはガサガサ・バリバリと音がするため、少し音の少ない紙カップ入りポップ・コーンに比べると人気が無い。チョコレート、アメ、ガムも袋の音は出る。そこで袋菓子を音の出難いものに入れたり、ポテチ販売を止めたりしているところが多い。午前中からのビールとか、揚げのフレンチフライ、ホットドッグも臭いの点でやや嫌われる。また、不必要な行動が視界に入るのもよくない。ケイタイを使いバックライトを見せられるのも鑑賞の邪魔になるものである。